

〈特別企画「感染症とラテンアメリカ」〉

感染症のポリテックス ——ブラジルの事例を中心に——

鈴木 茂

はじめに

新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大は、改めて人類が感染症と戦ってきた歴史への関心を高めた。日本でも、カミュの『ペスト』（1947年）がベストセラーとして話題になったり、進化生物学者ジャレド・ダイヤモンドの『銃・病原菌・鉄』（1997年）が増刷を重ねたりして、社会現象となったのも記憶に新しい。14世紀ヨーロッパにおける黒死病（ペスト）流行や、コッホやパストゥールによる19世紀末の細菌学と予防医学への貢献など、感染症は高校の世界史教科書に必ず登場しているものの、必ずしも政治・経済・社会の大きな変動の主要因とはみなされてこなかった。それは、コッホやパストゥールが、通常、文化史や科学史の文脈で登場していることにも表れている¹⁾。

もちろん、政治・経済・社会の大きな変動の要因は複合的・重層的であり、ダイヤモンドが描くメキシコ・ペルーの征服と感染症の関係ほど単純ではない。ハイチ革命の際にも、フランス軍が黄熱病に悩まされ苦戦したのは確かであるが、トゥサン・ルヴェルチュールらの勝利の主要因を黄熱病と考えることはできない（ジェームズ 1991: 319, 326）。新型コロナウイルス感染拡大から私たちが学ばなければならないのは、感染症の流行が政治・経済・社会に潜在していたどのような「問題」を浮き彫りにしたのか、どのような

政治・経済・社会的文脈の中で感染症が「問題」として認識されたのか、そこからどのような歴史的な意味を読み取ることができるのか、を問うことであろう。本稿では、主に独立後のブラジルを例に、感染症の歴史的意味を政治・経済・社会的な文脈の中で考えてみたい。

I 感染症と先住民社会

1 新型コロナウイルスと先住民

2020年2月26日、ブラジル初の新型コロナウイルス感染者がサンパウロで確認された。61歳の男性で、イタリア観光からの帰国者であった（Brasil 2020）。3月初めの時点では、感染者は海外からの入国者に限られていると楽観視されたものの、3月22日には国内全州で感染者が確認されるほど急拡大し、年初来第20週目にあたる5月16日には全国の感染者は約23万3,000人、死者も約1万5,000人に達した。なかでも、人口100万人あたりの感染者数と死亡者数を地域別で見ると、北部がそれぞれ2,358人、156人を記録して最も深刻であり、ブラジル最多の先住民人口を擁するアマゾナス州では4,747人と331人で、国内最悪であった（Cavalcante et al. 2020: 5-7）²⁾。

アマゾナス州初の感染者（英国からの帰国者）が州都マナウスで見つかったから2週間余り後の4月1日、アマゾン奥地のココマ族の先住民村落に住む20歳の女性の感染が判明した。この女性の感染源は、助手として一緒に働いていた白人医師であった（Biasetto 2020）。その後、数ヶ月のうちに新型コロナウイルスは、先住民の間で猛威をふるう。2021年9月の時点で、ブラジル全国の先住民の感染者は6万人に迫り、死者は1,200人を超え、約300の全部族のうち163部族に広がった（ISA 2022）。その大きな原因のひとつが、外部からの立ち入りが禁止されている先住民の土地における違法な金採掘や樹木伐採、森林破壊を伴う農牧業開発であるとされる。メディアや人権団体、環境保護団体などからは、2019年1月に就任したボルソナーロ大統領がアマゾン開発に積極的な姿勢をとってきたことも大きく影響していると指摘されている³⁾。

2 感染症の到来と先住民

新大陸の植民史の例にもれず、ブラジルもまた最初のヨーロッパ人の到来とともに、多くの先住民が感染症の犠牲となった。1550年代にフランスが現在のリオデジャネイロに築いた「南極フランス」の記録を残したジャン・ド・レリーは、到着直後に参列した改革派教会の聖餐式で、指導者ヴィルガニョンの祈りの言葉に出てきた「おお寛仁の神よ（中略）最も残酷なる病を送って彼らを苦しめつつ」の箇所、「彼がこんなことを述べたのは、この年（1557年—筆者注）、非常に頑健な未開人たちが伝染性の悪質な熱病に悩まされ、大勢が、しかも最も性悪な男共が死んだからである」という注をつけている（レリー1987: 99, 349）⁴⁾。

やがて多くの先住民は内陸部に逃れ、沿岸部では黒人奴隷制プランテーションが展開する。しかし、感染症は内陸部の奥深くまで侵入した。アマゾン川流域では、修道会の布教村建設や薬草・熱帯果実などの交易の増大が大きな要因となった。植民地時代の有名な記録として、フランスの地理学者ラ・コンダミーヌの旅行記がある。ラ・コンダミーヌは、ペルーで赤道の子午線を観測したのち、1743年12月、アマゾン川を下って河口付近のベレンに到着した。さらにフランス領ギアナに渡航する予定であったが、「天然痘が流行して先住民が逃げ去っていた」ため、約1ヶ月間、船の漕ぎ手を見つけられずに足止めを食らった。ラ・コンダミーヌの記述で興味深いのは、特定の集団間での罹患の違いに注目している点である。「森から連れてこられて間もない、裸で暮らす布教村の先住民」の方が、「布教村生まれやポルトガル人の中での生活歴の長い先住民より」重症化しやすく、「アフリカから連行された黒人奴隷」は先住民より「抵抗力が強い」。また、15、6年前の流行の際、カルメル会修道士が布教村の先住民に人痘法を試したところ効果があり、先住民奴隷の所有者も利用するようになったという（La Condamine 1745: 182–184）。

ポルトガル王室のリオ移転とブラジルの開港を機に、欧米諸国においてアマゾン川流域の動植物や鉱物資源への関心が高まり、博物学者や地質学者が

来訪するようになった。動物学者スピックスと植物学者マルティウスは、オーストリア皇帝フランツ 1 世（神聖ローマ皇帝フランツ 2 世）の娘レオポルディナ大公女とポルトガルの王位継承者ペドロ・デ・アルカンタラ（初代ブラジル皇帝ペドロ 1 世）の婚約を記念して派遣された調査隊に参加し、1819 年 8 月、ベレンに到着するなり、天然痘の流行に遭遇した。毎日 3、40 人が死亡し、すでに半年間に 3,000 人以上の死者を出していたという。ラ・コンダミーヌが言及した 1743 年の流行より激烈であると述べ、これまた人種別の違いに着目し、「インディオやインディオの混血」に犠牲者が多い一方、黒人には危険性が少なく、ヨーロッパ人はさらに軽症ですむと観察している。なお、この 1819 年の流行時には、すでにジェンナーによって種痘法が発明されており、パラ州当局が英領バルバドスから病苗を持ち込んで種痘が試みられたという（Spix e Martius 1981: 39）。この流行は、数ヶ月前、アフリカ人奴隷を輸送してきた船がベレンに入港したのをきっかけに始まったとされている（Spix e Martius 1981: 25）。

1819 年の天然痘流行はアマゾン川沿岸にかなり広まったようで、二人がマナウス（当時はバラ・ド・リオネグロ）に到達する途中で立ち寄った港町にも感染者が見られ、パリンチンスとイタコアチラ（当時はセルパ）には県知事の命令で天然痘の検疫所が設けられていた（Spix e Martius 1981: 114, 132）。二人はマナウスからさらにアマゾン川本流（ブラジルではソリモンイス川）をテフェー（当時はエガ、またはエガス）まで遡った。テフェーは元はカルメル会の布教村で、多くの部族が集められていたが、天然痘とマラリアによって人口が激減していた（Spix e Martius 1981: 179）。それから先に進むにつれてマラリアへの言及が増え、さらにテフェーから支流のジャブラ川を単独で探索したマルティウスは、沿岸で白人から梅毒を移された先住民に出会っている（Spix e Martius 1981: 255）。

こうした防疫の努力にもかかわらず、天然痘はアマゾン川上流部まで遡った。1846 年から 1847 年にかけてペルーからベレンまでを単独で旅行したフランス人博物学者ポール・マルコイは、ウカヤリ川からアマゾン本流に入る

と、オマグア族の布教村を皮切りに、沿岸で次々に天然痘で人口が激減したり、放棄されたりした布教村を目撃している。例えば、ブラジル領内のカルメル会布教村サンパウロ・デ・オリヴェンサ付近には、「宣教師たちの支配と塩漬け魚の摂取、天然痘の侵入によって激減した」チクナ族の生き残りが住んでいた (Marcoy 1875: 340)。宣教師は、布教村の人口減少を補うため、異なる部族の先住民を移動させて住ませたが、この町に上流から連れてこられたオマグア族は、人口維持のためにココマ族、チクナ族、マヨルナ族との混血を強いられ、独自の言語や習慣の消滅の危機に瀕していた。「哀れなオマグア族よ。長く敵対してきたチクナ族やマヨルナ族との友好を強いられる日が来ようとは、だれが想像できただろうか」 (Marcoy 1875: 342)。

マルコイは、マナウスからネグロ川を遡りモウラに立ち寄った。モウラは元々要塞があった場所に 1720 年に創建された町で、「少数のポルトガル人、マナオ族、カヤライ族、コエルナ族、ユマ族」からなっていた。1758 年、ネグロ川開発の拠点として市に昇格し、人口 6,000 を数えるまでに成長したが、天然痘の流行によって 3 つの部族が全滅し、現在の場所に移設されたのであった (Marcoy 1875: 413)。

1850 年代初め、ベレンでは天然痘とともに、初めての黄熱病の大流行が起きた。1848 年から 11 年間にわたってアマゾン川流域の動物標本採集に従事した英国の博物学者ヘンリー・ベイツは、1851 年に一時ベレンに戻ったとき、前年に発生した黄熱病に続き、天然痘が発生していた状況を詳しく伝えている。その際、ラ・コンダミーヌやスピックスとマルティウス同様、人種による違いについて、次のように述べている。「黄熱病は白人とマメルコ (白人と先住民の混血—筆者注) に最もひどく襲いかかるが、黒人はほぼ免れている。しかし、天然痘はとりわけ先住民と黒人、混血の人々を標的とし、白人はほぼ外れている。そして、4ヶ月の間に人口の 20 分の 1 が犠牲となった」 (Bates 1962: 205)。ベイツ自身も黄熱病に感染した。「どの医者も別の伝染病の患者への対応にかかりっきりで、助けを求めることが期待できなかった。そこで、何回も熱病にかかった経験を生かして、自分が自分の医

者になる以外なかった。」(Bates 1962: 206)。

ベイツは、4年半にわたって、スピックスとマルティウスやマルコイも訪れたテフェーを拠点に活動した。かつて周辺にはパセーと呼ばれる「平和的・紳士的で勤勉な、農業や漁業に励み、常に白人に対して友好的であった」部族がたくさん住んでいたが、数家族を残すのみで、「今や絶滅寸前」となっていた。ベイツは、その主な原因を「文明化された集落からの訪問者があると常に現れる病気」にあるとし、それは「ブラジル人が「鼻風邪」と呼ぶ普通の風邪の症状が出る緩やかな熱病であるが、たいてい死に至る」(Bates 1962: 313)のものであった。

ただし、ベレンについて、ベイツは基本的に健康地と考えていた。1855年のコレラ流行が収束すると、「健康的な気候が徐々に回復し、今やかつての評判を急速に取り戻しつつある」とし、「パラー (ベレン—筆者注) には重大な風土病はなく、かつてニューヨークやマサチューセッツの病弱者の保養地であった。安定した気温、常緑の木々、強い夕風の風と驟雨のために太陽の熱が和らげられる乾期の涼しさによって、地球上で最も快適な気候の一つに数えられる。」と絶賛している (Bates 1962: 20)。

3 アマゾン開発と先住民

19世紀半ば以降、経済的利益を前面に押し出した調査隊が急増する。米国では、海洋学者としても有名な海軍士官マシュー・F・モーリーが、「ミシシッピ川流域の延長」として、米国南部の商工業の発展のためにアマゾン川を開放するよう世論を喚起していた。その結果、米国海軍が資源調査と航路確認のための調査隊を派遣することになった (Hill 1970: 218-222; Machado 2005: 56-59)。この調査には、チリ駐在の海軍士官ウィリアム・ハーンドンとアードナー・ギボンが当たり、1851年から翌年にかけて、ペルー、ボリビアからアマゾン川水系を下って大西洋に抜けるかたちで実施された。隊長格のハーンドンは、ベイツ同様、ベレンは「素晴らしい健康地であり、どんな感染症の流行とも無縁であった」と考えていたが、1850年2月を機に

状況が一変したと記している。それはベイツも目撃した「ベルナンブーコ（レシーフェー筆者中）から来訪した船が運んできた黄熱病」の流行であった。翌年の天然痘の大流行については、当時1万4,000人ほどであった市の人口の4分の1が犠牲となったと述べ、「今やこの町は二度とこれらの伝染病から自由ではなくなるであろう。」と悲観している（Herndon 1853: 335）⁵⁾。

ギボンは途中でハーンドンと別れ、ボリビアからアマゾン川を目指し、マモレー川、マデイラ川などを経てマナウスに達した。その報告書には、アマゾン川最上流部でもブラジル起源の天然痘が大流行していたことを示す記述が随所にある。ボリビア・ベニ県のピンチュッタという川下りの起点となる小さな船着場で最初の天然痘患者に遭遇し、「この天然痘はブラジルから河川沿いに遡上したもので、最終的にはコチャバンバにまで到達する」と記している（Gibbon 1853: 197）。知事のカヌーが下流で荷を下ろして戻ってくるまで待機しようと、知事所有の家屋を訪ねると、若い「クリオーリョ」が慇懃に出迎えた。「私たちは、知事や住民は天然痘を恐れてすでに逃げ出したと聞いていた。若い男は、小柄なインディオ少年に、この上なくゾッとする視線を向けた。少年はポンチョに包まれ、私のそばに横たわっていた。『召使いは重症です。ここから先のインディオはひどくやられてしまいました。』」（Gibbon 1853: 196）

ベニ県の県都トリニダーを目指してカヌーでマモレー川を下っている途中、すれ違ったカヌーから、ギボンらの船頭が下流に残してきた乗組員の何人かが天然痘にかかっていることを知らされる。現地に到着してみると、17日間放置されている間に4人が3人に減っており、他の一人は高熱のあまり川に飛び込んで行方不明になっていた。二人はすでに働けるほど回復しているものの、一人はまだ症状が重ままだカヌーに乗せて出発したので、ギボンは天然痘が全員に移るのではないかとの不安に襲われた（Gibbon 1853: 212-213）。

1852年7月初めに到着したトリニダーの感染状況はさらに悲惨であった。「私たちは流行の真ただ中に来訪した」。町はずれに設けられた病院には

100人の患者が収容されており、毎日、さらに大勢の患者が運ばれていた。病院の医師すら感染し、ギボンらの宿舎の同じフロアの一室で寝込んでいた。一行は、新しいカヌーと漕ぎ手を求めて、この町で1ヶ月半ほど足止めされるが、その間の犠牲者は100人以上に上ったという（Gibbon 1853: 259）。滞在中、50キロほど離れたロレートという先住民の町を訪ねているが、そこの病院も天然痘患者で一杯であった（Gibbon 1853: 254）。

結局、一行はカヌーと漕ぎ手を確保できず、マデイラ川のボルバから遡上してきた、「ベレン在住」のアントニオ・カルドーザ（カルドーゾ）なる商人からカヌーを借りて下降を続けた。こうした行商人の活動を通じて、アマゾン川水系の上流と下流はつながっていたのである⁶⁾。250キロほど下流のエクサルタシオンに到着すると、「町に何人かの天然痘患者がいた」ので、現地役人から宿の提供を受けても断っている（Gibbon 1853: 263）。ブラジルとの国境線が走るグアポレー川の合流点まで到達すると、一行はこの国境の川に入り、マトグロッソ県最奥のプリンシペ・ダ・ベイラ要塞を訪れたが、上陸する前に「ベニ県からの天然痘の侵入を警戒」する兵士の尋問を受けた（Gibbon 1853: 273）⁷⁾。

「マデイラ」とはポルトガル語で「木」を意味する。ギボンが通過したマデイラ川は、その名の通りおびただしい流木が沈んでおり、中流部で溪流が連続するため、蒸気船が航行できない危険な川であった。しかし、ブラジルのアマゾン川は1862年に外国船の航行に開放されたことで、マデイラ川はボリビアから大西洋に出る経路として重要性が増した。ブラジルも首都からマトグロッソへのアクセスや、商品価値が上がりつつあった天然ゴムや薬種の輸出のために交通路の確保が必要となり、溪流部を迂回する道路や鉄道の建設に乗り出した。ブラジル政府から現地調査を任されたのが、ドイツ人技師ケラー父子（ヨセフとフランツ）であった。1868年6月から11月まで約半年をかけ、ボリビアのマモレー川岸のエクサルタシオンまでを往復している（Keller and Keller 1869: 4-29）。フランツは、1874年にドイツでドイツ語版が、同じ年と翌年に英国と米国で英語版が刊行された『アマゾン川とマデ

イラ川』で、先住民社会の現状と将来について1章を割いて、修道士による布教活動やポルトガル人による奴隷狩りに加え、天然痘などの感染症によって人口が激減しつつあったことを鋭く指摘している。かつてブラジル南部の鉄道建設の事前調査に携わった際に先住民から投げかけられた、「なぜ白人は森林に侵入して私たちの邪魔をしないでいられなかったのか。なぜ私たちは白人たちのように生活しなければならないのか。」という疑問を想起しつつ、「私はどう答えたらよかったのだろう。どれだけ情に訴えて文明の恩恵を説いても、村を破滅させつつあった麻疹が持ち込まれたことだけで、たやすく反論されてしまっただろう。」と振り返りつつ、マデイラ川流域の先住民の未来をこう予測した。「先住民が白人と接触したところではどこでも、不吉な運命が決定的となった。北米のもっと元気な先住民同様、身体的・精神的に破壊される。破壊の程度を遅らせるには、宗教よりも農業や製造業への手当を厚くするという条件付きで、かつての布教村にならって集住させるしかない。」(Keller 1875: 130)。

II 移民導入と感染症

1 ヨーロッパ人移民への期待

先住民の厳しい現状や暗い未来とは裏腹に、ケラーはアマゾン川流域をヨーロッパ人の有望な移住先と考えた。その主な障害の一つが感染症であった。ブラジルとボリビアの国境付近のマモレー川を進みながら、「これらの広大な国々への植民の成功にとっての主な障害は、川の水位上昇による洪水ではなく、間欠熱(マラリアー筆者注)とアマゾン川との交通・通信の困難、マモレー川とグアポレー川の合流部の森林をうろつく野蛮で残忍な先住民が危険なほど近くにいることである。しかし、周知の通り、もはやどこの先住民もこれ以上文明の影響に抗しきれず、ここでも文明の前に退却を余儀なくされるだろう。」(Keller 1875: 62)。

ケラー父子によるアマゾン奥地の調査が行われた頃、ブラジルはパラグアイ戦争(1864~70年)の真ただ中であつたが、終戦とともに奴隷制廃止

と移民導入が政治課題として浮上する。すでに1850年9月、エウゼビオ・デ・ケイロス法によって大西洋奴隷貿易が禁止され、1871年9月には「子宮自由法」(新生児解放法)が公布された一方、1850年代から60年代にかけて、中国人などアジアからの移民導入が試みられていた。しかし、移民導入問題は、単なる労働力の調達だけでなく、ブラジル国民の「白色化」をも目的として議論されたことに注意する必要がある(レッサー2016: 20)。事実、当時のブラジルでは、同じヨーロッパといっても、南欧ではなく北欧からの移民の方が「勤勉」で「優秀」と考えられており、すでに独立前の1810年代からスイス移民の入植地が作られていた。1840年代から50年代にかけては、サンタカタリーナ県ブルメナウ、ジョイヴィレ、リオグランデ・ド・スル県サンレオポルドなど、南部各地にドイツ人入植地が築かれており、1857年にブラジルにやってきたケラーは、自民族中心的な意識を隠すことなく、そうした「実績」を背景に、ドイツ人移民を推奨している。『アマゾン川とマデイラ川』の冒頭には、1870年代前半のケラーのブラジルをめぐる現状認識が次のように述べられている。

「1872年1月1日からの奴隷の新生児の解放によって、真の進歩への中心的な障壁である奴隷制の廃止は単なる時間の問題となった。しかし、自信をもってわが国の優良な農民にブラジルへの移民を推奨できるようになるには、移民に現地人と平等な政治的権利が保証され、民事婚の権利が付与されるのを待たなければならない。もっとも、現在の条件下においても、わが国にあふれている貧しい農民や職人は高い賃金によって利益を得るだろう。ドイツ人の移民だけが、新しい祖国に本当に定住し、国家の負担を誠実に分かち合っており、人口が希薄なこの国を真に助けることができる。そして、ブラジルは、毎年、数千人が上陸しては、わずかな稼ぎを手にするなり帰国してしまうポルトガル人を見ており、こうしたラテン人とドイツ人の根本的な違いを判断する優れた能力を有している。」(Keller 1875: vii)。この一節は、ドイツ人という特定の国民=民族の部分を除けば、1870年代前半のブラジルの支配層がヨーロッパ人移民へ寄せた「期待」の内実をよく反映している。

2 黄熱病と公衆衛生への関心

1850年にベイツがベレンで見た黄熱病の流行は、ブラジル全土にとっても史上初の流行であった。奴隷船によってアフリカから最初にサルヴァドールにもたらされたもので、1849年から1850年にかけて首都リオデジャネイロでも猛威をふるい、以後数年間、夏ごとに黄熱病の流行を繰り返した (Cooper 1987: 237)。これを機に帝国政府の機関として首都に創設されたのが、ブラジル最初の公衆衛生機関 (公衆衛生委員会、Junta Central de Higiene Pública) であった。その後、1860年代の小康状態を挟んで、リオデジャネイロでは1868年に再来し、1873年には3,659人、続いて1876年には3,476人の死者を出すほど大流行した。そのため、政府は本格的な対策に乗り出し、発生源として目をつけた不衛生な住宅の取り壊しなどを行った (Cooper 1987: 237-238)。

ところで、前述のとおり、ベイツは1855年にベレンでコレラが流行したことも記していたが、リオデジャネイロも1855年から翌年にかけて、初めてコレラに襲われた (Cooper 1987: 246-248)。天然痘も収束したわけではなく、結核も「死の病」として恐れられていた。では、なぜ黄熱病だけが特別視され、特別な感染予防策の対象とされたのだろうか。

ここで想起されるのが、感染症と人種の関係についての、19世紀の博物学者や旅行家の記録である。スピックスとマルティウスは、天然痘について、「インディオやインディオの混血」に犠牲者が多い一方、黒人には危険性が少なく、ヨーロッパ人はさらに軽症ですむと指摘していた。ベイツは天然痘の標的として先住民に並んで「黒人、混血」を挙げているものの、「白人はほぼ外れている」とした点で共通している。コレラについては、1850年のリオデジャネイロでは、流行が頂点に達した11月だけで死者は2,700人に上り、公衆衛生委員会の初代委員長を務めていた公衆衛生医フランシスコ・デ・パウラ・カンディドは、死者の95%が「衛生にほとんど注意を払わない奴隷や貧民」であると報告している (Cooper 1987: 248; Calhoub 1993: 459)。この数字にはやや誇張はあるにしても、ある記録によれば、流行が収

束した1856年4月までのリオデジャネイロの死者総数4,843人のうち、2,513人が奴隷であったとされる（Cooper 1987: 249）。これとは反対に、黄熱病については、ペイツは「白人とマメルーコ」が感染しやすく、黒人は「ほぼ免れている」と述べている。1873年と1876年の流行でも同様に、黒人は強い抵抗力を発揮したと考えられていた（Chalhoub 1996: 89）。

当時、首都にはポルトガル人移民が増加しつつあったが、黄熱病感染者の多くが入国間もない移民であった。とりわけヨーロッパ移民自身が黄熱病に対して強い恐怖感を抱いていたと言われる。それゆえ、奴隷制の「終わりの始まり」の起点としての「子宮自由法」で幕を開けた1870年代、黄熱病はヨーロッパ人移民導入のために取り除かなければならない障壁として認識されたのであった（Stepan 1981: 49; Chalhoub 1993: 458; Chalhoub 1996: 88–90）。その結果、後に公衆衛生委員会の第2代委員長を務める公衆衛生医ジョゼ・ペレイラ・レゴを中心に、黄熱病に焦点を当てた対策が進められた。

シドニー・シャルフブは、当局の黄熱病とコレラや天然痘などその他の感染症への異なる対応の背景に、ヨーロッパ移民導入によって国民を「白色化」しようという願望があったことを指摘している。政治家や官僚、コーヒー農園主にとって、「コレラは過去の、奴隷制の、黒人労働者の病気」であり、黄熱病は「未来の、賃金労働者の、白人移民の病気」であった（Chalhoub 1996: 93）。その意味で、天然痘もコレラ同様、「過去の」病気であり、これらの感染症によって黒人の命が失われることも、ブラジル国民の「白色化」を促すものとして看過されたのであった。

Ⅲ 「文明化」と民衆～「種痘の反乱」

1 種痘の導入

先述したとおり、1819年にバレンで天然痘が流行したとき、英領バルバドスから取り寄せた病苗を用いて種痘が行われた。スピックスとマルティウスは、だれに種痘が施されたのかについては書き残していないが、施術された人々は、実際に発症して重篤な状態に陥ったという（Spix e Martius 1981:

39)。異説はあるものの、ブラジルへ種痘が導入されたのは1804年とされるが、その最初の種痘の対象者は奴隷であったことを考え合わせると、初期の種痘実施の目的と対象者が推定できる。以下、シャルフブに依拠して、ブラジルへの種痘導入の経緯を確認しておこう。1804年、ブラジル生まれのポルトガルの軍人で、バイーアに農園を構えていたフェリスベルト・カルデira・ブラント（後のバルバセナ公爵、ペドロ1世の側近）が、一人の医師をリスボンに送って種痘法を習得させ、帰路、この医師が、同伴させていた7人の子供の奴隷に接種した。その後、この方法がリオデジャネイロに伝えられ、副王府庁舎において週2回、木曜日と日曜日に実施されることになり19世紀末まで続く。1808年にポルトガル王室がリオデジャネイロに移転すると、摂政ジョアン6世の下で種痘局が設けられたが、その重要な目的の一つは、奴隷の天然痘感染予防であった。例えば、1820年の首都において種痘を受けた2,688人のうち、1,803人（67.0%）が黒人、284人が混血（パルド）、8人が先住民で、白人は593人に過ぎなかった。黒人を全て奴隷と仮定すれば、その比率は、1821年の首都の総人口に占める奴隷の割合45.6%を大きく上回っていた（Chalhoub 1996: 107-111）。

ところが、当初こそ奴隷主に歓迎されたとはいえ、19世紀半ばにかけて、種痘の接種率は伸び悩み、種痘に対する「嫌悪感」も生まれていった。シャルフブは、その一つの理由として、種痘で出来た瘡蓋から取り出した膿を直接新しい希望者の腕に擦り付けるという方法ゆえに、接種を受けてから8日目以降に接種場に向く義務を果たさない者が少なくなかったことを挙げている。しかも強制的に駆り出されるのを避けるために、正確な住所を伝えなかったり、接種後に居処をくらませたりする場合も珍しくなかったという（Chalhoub 1996: 113-114）。

2 「種痘の反乱」

ここで注意しなければならないのは、リオデジャネイロという都市における奴隷の生活様式が、コーヒー農園などの農村部とは大きく異なっていたこ

とである。都市には零細な奴隷主が多く、生活の糧を行商などによる奴隷の稼ぎに依存していた。こうした奴隷は「ガニョ（稼ぎ）」と呼ばれたが、しばしば奴隷主とは離れて住居を借りて暮らし（「ソプレ・シ」（自活））、一定の行動の自由を享受していた。その結果、当時、「コルティツ（蜂の巣）」などと呼ばれていた貧民の集合住宅には、解放民や移民と奴隷が混在していたのであった。1871年の「子宮自由法」は新生児の解放とともに、社会的慣習であった有償解放を法制化したため、これ以降、農村部から首都への解放民の大規模な移動が起きた。その結果、ポルトガル人移民の増加とも相まって、首都とその周辺では深刻な住宅難が起き、衛生状態も劣悪の度を極めた（Chalhoub 1990: 212-216）。

そこで登場したのが種痘の義務化の強化であった。首都では、すでに1830年代に、市条例によって生後3ヶ月から1歳までの接種の義務化が始まり、その後も何度か、効果のない条例の改定を繰り返していた。1870年代には、小児の接種義務に加え、成人にも接種義務が課されることになり、接種証明がない場合、罰金のほか、公務員への応募資格や上級学校への入学資格を与えないなどの罰則が設けられた。また、市の係官が住民のもとに戸別訪問を行い、接種証明の提示を求め、提示できない者から罰金を徴取することになった（Chalhoub 1996: 153-154; Carvalho 1987: 95-96）。もはや種痘は奴隷制の維持ではなく、公衆衛生が目的となったのである。

これには住民が反発し、接種作業も混乱したため、接種は進まず、1880年代になると一時、接種そのものが中止された。そして、種痘の忌避者が集住する貧困層の集合住宅を標的にした上で、集団接種ではなく、住民の住居での訪問接種を中心にして、接種済みの者の腕の瘡蓋から出る膿を別の者の腕へ擦り付ける方法から牛痘を接種する方法へ転換する方針が固まっていた（Chalhoub 1996: 156）。1889年11月の「共和国宣言」から間もなく、臨時政府は種痘の義務化を定めた法律を更新し、対象者の拡大を図った。その結果、1890年代には一定の成果が見られたものの、さらに強力で推進するため、1904年6月、政府は首都の全市民に接種を義務化する新たな法律を

議会に提出し、強硬な反対意見を押し切って、10月31日に成立させた。しかし、議会の審議を必要としない、接種をめぐる細則や方法等を規定する施行令の「素案」なるものを新聞がすっぱ抜くと、大規模な反対運動や急進的な共和主義者によるクーデター騒ぎが発生し、約1週間にわたって首都の都市機能は失われた。いわゆる「種痘の反乱」である。

予防接種、とりわけ種痘に恐怖心を抱いた民衆による反対運動や蜂起は世界各地で見られ、決して珍しくはない。1904年のリオデジャネイロでの「種痘の反乱」の特異さは、「文明化」を標榜する政府によって、大規模な都市改造や徹底した公衆衛生政策の一環として種痘の義務化が強行された点にあった。1889年11月の「共和国宣言」は、コント流の実証主義者の軍人が主導した政変であったが、2代にわたる軍人大統領の後、1894年以降、サンパウロ州のコーヒー農園主を中心とする輸出農業オリガルキーが権力を独占し、強権的に首都の国際港湾都市への転換と美化に取りかかった。1902年11月、大統領に就任したロドリゲス・アルヴェスは、首都の市長職を任命制にし、パリ留学中にセーヌ県知事オスマンの下で都市工学を学んだペレイラ・パッソスを起用した。また、パリのパストゥール研究所への留学から帰国したばかりの、若干30歳のオズワルド・クルスを連邦政府の公衆衛生局長に任命し、公衆衛生の事実上の全権を委ねた (Stepan 1981: 85; Meade 1997: 89)。こうして1903年から港湾整備と、それに連動するリオ中心街の大改造が始まった。1904年9月7日に開通した約2キロのメインストリート (現在のリオブランコ大通り) の建設のために、約600軒の建物が取り壊され、約1万4,000人が住居を失った。住民は、郊外に移り住んだり、市内の丘の斜面に掘立小屋を建てて住み着いたりせざるをえなかった (Sevcenko 2010: 87; Needell 1987: 38–39)。一方、オズワルド・クルスは、黄熱病撲滅のため、全市に消毒隊を派遣したほか、住民の抵抗を抑えるために軍や警察まで動員して貧困層の集合住宅を訪問し、一方的に使用停止や解体を命じた (Stepan 1981: 85–91; Carvalho 1987: 94–95)。また、種痘の実績を上げるために、貧困層の住居を訪問し、文字どおり、力づくで接種を強制した。事実、

1890年代以降、首都では訪問接種が約70～80%を占めるようになる(Chalhoub 1996: 161)。こうした手法に対し、反対派は現実と想像を混在させながら、家長が留守の間に妻や娘に肌を露出させるといった「名誉の侵害」や、腕ではなく太腿に接種するといった噂さに憤慨したのであった(Carvalho 1987: 131)。

最初、「種痘の反乱」は、急進的な共和主義者の元軍人の国会議員や、港湾労働者組合が主導するかに見えたが、港湾地区の住民が道路にバリケード(日露戦争時にロシア軍が陣地とした旅順港にちなんで「ポート・アーサー」と呼んだ)を築き、数日間、首都全体を麻痺させた(Chalhoub 1986: 201)。そこでは、一種のアウトローである「カポエイラ」と呼ばれる人々が参加したり、オラシオ・ジョゼ・ダ・シルヴァ、通称「プラタ・プレタ(黒い銀)」のような民衆の指導者が現れたりした。混乱に乗じて、共和主義急進派軍人のクーデター未遂が起きるが、結局、11月16日、政府は戒厳令を敷き、軍を投入して鎮圧する。しかし、種痘を義務化した法律を撤回せざるをえなかった(Sevcenko 2010: 123)。

「種痘の反乱」という通称とは裏腹に、1904年のリオデジャネイロにおける民衆反乱は、種痘そのものへの反対というより、強権的な「文明化」政策全般に対する不満の爆発であったと評価されている。カルヴァリヨによれば、「敵は種痘ではなく政府、とりわけ政府による抑圧」であり、種痘の強制は、「個人の自由と名誉という神聖な空間への侵害」と扱えられたのであった(Carvalho 1987: 136)。また、シャルフは、この出来事を、政治の議論が議会だけでなく街頭でも行われるようになった、リオデジャネイロの政治文化の転換点を画したと評価している(Chalhoub 1986: 201–202)。以後、街頭運動はリオデジャネイロの政治文化として定着し、1960年のブラジルへの首都移転とも無縁ではない。

結びにかえて

新型コロナウイルスが出現した2019年のほぼ100年前、世界は悪性イン

フルエンザ、いわゆる「スペイン風邪」の脅威にさらされていた。この二つの感染症と相前後して、ヨーロッパで大きな戦争が勃発したのはなんとも皮肉である。戦争が感染症を生み出したわけでも、感染症が戦争を引き起こしたわけでもないが、両者には奇妙な因縁が感じられる。

ロシアのウクライナ侵略は措くとして、周知の通り、第一次世界大戦は、悪性インフルエンザの世界的な蔓延の大きな要因となった。ブラジルも例外ではなかった。開戦時、ブラジルは中立を守っていたが、自国商船への攻撃が重なり、1917年10月、ドイツに宣戦布告した。ブラジルは2つの活動で連合国に協力した。一つは医療使節団の派遣で、1918年8月、医師・看護師など総勢158人がパリに送られた。モンパサナスのイエズス会修道院に臨時の病院を開設し、1919年11月まで治療に当たった。フランス到着前、この使節団の派遣船が西アフリカのダカールでセネガル兵を乗せたところ、その中に感染者がおり、次の寄港地であったアルジェリアのオランまでの航海中にセネガル兵と使節団員の死者を出した (Schwarcz and Starling 2020: 52–53)。もう一つは、英国海軍と共同での南大西洋におけるドイツ潜水艦の監視活動であった。ブラジル海軍は8隻の艦船と1,502人の兵員を提供したが、1918年8月、西アフリカのフリータウンに寄港した際にウィルスが侵入し、1ヶ月後のダカール入港時には200人以上が感染しており、50人もの死者を出した (Schwarcz e Starling 2020: 58–59)。

ブラジル国内での感染は、1918年9月ごろに始まったとする説が有力である。9月9日、リヴァプールとブエノスアイレスを結ぶ定期貨客船デメララ号が、乗客・乗員合わせて約730人を乗せてレシーフェに到着した。この船は同11日にサルヴァドール、同15日にリオデジャネイロ、さらにサントス、モンテビデオを経て、同25日、終着地ブエノスアイレスに到着した。すでにサントスを出港する頃には感染源であることが明らかになっており、新聞は「死の船」と報じていた。しかし、モンテビデオまでは特段の検疫措置は講じられず、ようやくブエノスアイレス入港時に徹底した消毒がなされたのであった (Bernardo 2020)。この間、ブラジルでは、デメララ号の寄港

地を起点に、内航水運の航路を通して沿岸部に、鉄道を通して内陸部に瞬く間に感染が広がっていった (Schwarcz e Starling 2020)。その状況は、当初の油断や当局の不作為と同様、新型コロナウイルスの場合と類似点が多い。

感染症は、ときに奇妙な都市伝説を生み出す。ブラジルにおけるスペイン風邪の流行をめぐるよく語られるのは、1919年、大統領に再選されて間もないロドリゲス・アルヴェスがスペイン風邪で亡くなったというものである。20年ほど前、ある翻訳書の中で筆者が参考資料として作成した年表にも、このことを書き込んでしまった (アレンカール 2003: 723)。最近の研究によれば、本当の死因は悪性貧血であったが、第1共和政期の有力諸州の政治的バランスを維持するため、大統領の重病説を隠蔽しようとメディアを通して意図的に流された噂であったことが明らかにされている (Schwarcz e Starling 2020: cap.10, esp. 310–317)。

「種痘の反乱」という名称は、1904年の首都における民衆反乱の背後にあった要因を矮小化しかねず、「スペイン風邪で大統領死去」という報道や噂は、政治的戦略を人々の目から遠ざけてきた。感染症は人々の恐怖を呼び起こすとともに、人々の思惑によって利用され、操作されてきた。悪性インフルエンザが第一次世界大戦を終わらせたわけではないが、1849年から1850年にかけてブラジル各地ではじめて流行した黄熱病は、1850年9月の奴隷貿易禁止法 (エウゼビオ・デ・ケイロス法) の成立と無縁ではない。19世紀後半以降の感染症、公衆衛生への関心の高まりは、その人種主義的な側面を含め、ブラジルにおける「近代化」=「文明化」の歴史的意味と深く関係している。感染症については、単なる歴史の「裏話」としてではなく、社会変化との関係について、今後深められるべき課題が多く残されている。

注

- 1) 例えば、コッホとパストゥールは、山川出版社『詳説世界史B』(2015年)では「19世紀欧米の文化」(280–281頁)、東京書籍『世界史B』(2017年)では「第2次産業革命と社会生活の変化」(308頁)、実教出版『世界史B新訂版』(2017年)では「19世紀のヨーロッパ・アメリカの社会と文化」(283頁)

に登場する。

- 2) 2010年の国勢調査では、州総人口の4.8パーセントにあたる約16万8,000人が「先住民」と回答し、これは全国先住民総人口の約5分の1にあっていた。なお、2010年国勢調査の全国先住民人口89万6,917人には、「皮膚の色もしくは人種 (cor ou raça)」の質問項目に「先住民 (indígena)」と回答した約81万7,963人に加え、「自身の伝統、習慣、文化、祖先など」を根拠として「先住民」を自認する人々が含まれる。
- 3) 新型コロナウイルスの先住民社会への影響、先住民による感染予防活動、ボルソナロ大統領の対応などについてのブラジル主要紙の記事は、ISAが開発しているサイト「Covid-19と先住諸民族」(<https://covid19.socioambiental.org>)にまとめられている。
- 4) この時の病名は不明であるが、ブラジルの最初の天然痘流行は、1562年1月、バイーアで始まったという。ブラジルの植民地時代の天然痘流行とアメリカ起源については、Alden and Miller (1987)を参照。
- 5) マシャードも指摘しているように (Machado 2005: 54)、マーク・トウエインがアマゾン行きを夢見てニューオーリンズを目指したきっかけは、ハーンドンの報告書を読んだことであった (参照、マーク・トウエイン『マーク・トウエイン自伝』勝浦吉雄訳、筑摩書房、1984年、134頁、同『ミシシッピの生活』上、吉田映子訳、彩流社、1994年、66頁)。なお、ハーンドン『アマゾン探検記』(泉靖一訳、河出書房新社、1977年)は第1部、第2部の抄訳で、ベレンの部分は訳出されていない。
- 6) アントニオ・デ・バロス・カルドーズは、この時期の旅行記にしばしば登場する人物で、各地に拠点を設け、カヌーによる行商やカメの卵油の採取など、アマゾン川上流部で手広く事業を展開していた。ベイツは、テフェー在住のポルトガル商人ダニエル・カルドーズから助力を得たが、アントニオとは親子関係にあるものと見られる。
- 7) 19世紀半ばの米国政府の強い意向を受けたもう一つの調査隊が、スイス出身のハーバード大学教授レイ・アガシを中心とするタイヤー調査隊であった。1865年4月にリオデジャネイロに到着した一行は、同年8月から翌年にかけてアマゾン川流域を探索した。アガシ夫妻の旅行記にはマラリアへの言及は散見されるものの、天然痘は皆無である。ただし、学生ボランティアとして参加していた、プラグマティズムの創始者ウィリアム・ジェームズは、リオ到着後まもなく天然痘にかかって生死の境をさまよった (Machado 2006: 41)。

参考文献

- アレンカール, シッコ, 他. 2003. 『ブラジルの歴史—ブラジル高校歴史教科書』東明彦, アンジェロ・イシ, 鈴木茂訳, 明石書店.
- ジェームズ, C. L. R. 1991, 『ブラック・ジャコバン——トゥサン＝ルヴェルチュールとハイチ革命』青木芳夫監訳, 大村書店.
- レッサー, ジェフリー. 2016. 『ブラジルのアジア・中東系移民と国民性の構築』鈴木茂, 佐々木剛二訳. 明石書店.
- レリー. J. 1987. 「ブラジル旅行記」ジャン・ド・レリー. ル・シャルー. ロードニエール共著『フランスとアメリカ大陸 二』高橋由美子, 宮下志朗, 二宮敬訳, 岩波書店.
- Agassiz, Louis. and [Elizabeth] Agassiz. 1871, *Journey in Brazil* (Boston: Fields, Os-good, & Co.)
- Alden, Dauril. and Miller, Joseph C. 1987, “Unwanted Cargoes: The Origins and Dissemination of Smallpox via Slave Trade from Africa to Brazil, c.1560–1830,” in Kenneth F. Kiple. ed., 1987, *The African Exchange: Toward a Biological History of Black People* (Durham: Duke University Press), pp. 35–109.
- Bates, Henry Walter 1962, [1864], *The Naturalist on the River Amazon* (Berkeley: California University Press). (縮約版からの邦訳: ヘンリー. B. 1990. 『アマゾン河の博物学者』長澤純夫訳. 思索社).
- Bernardo, André. 2020, “Gripe espanhola: a viagem em que o ‘navio da morte’ Demerara venceu bombardeios alemães e trouxe a doença ao Brasil,” *BBC NEWS*, November 20. (<https://www.bbc.com/portuguese/internacional-54907997>) (最終閲覧: 2021.12.31).
- Biasetto, Daniel. 2020, “Brasil tem primeiro indígena infectado por coronavírus, confirma governo do Amazonas,” *O Globo*, 1 de abril (<https://oglobo.globo.com/politica/brasil-tem-primeiro-indigena-infectado-por-coronavirus-confirma-governo-do-amazonas-1-24343438>) (最終閲覧: 2021.12.10).
- Brasil. 2020, “Brasil confirma primeiro caso do novo coronavírus,” (<https://www.gov.br/pt-br/noticias/saude-e-vigilancia-sanitaria/2020/02/brasil-confirma-primeiro-caso-do-novo-coronavirus>) (最終確認: 2021.12.10).
- Carvalho, José Murilo de. 1987, *Os bestializados: O Rio de Janeiro e a república que não foi* (São Paulo: Companhia das Letras).
- Cavalcante, João Roberto. et al. 2020, “Covid-19 no Brasil: evolução da epidemia até a semana epidemiológica 20 de 2020,” *Epidemiologia e Serviços de Saúde*, 29(4), pp. 6–7.

- Chalhoub, Sidney. 1990, *Visões da liberdade: Uma história das últimas décadas da escravidão na Corte* (São Paulo: Companhia das Letras).
- . 1993, “The Politics of Disease Control: Yellow Fever and Race in Nineteenth Century Rio de Janeiro,” *Journal of Latin American Studies*, 25 (3), pp. 441–463.
- . 1996, *Cidade febril: Cortiços e epidemias na corte imperial* (São Paulo: Companhia das Letras).
- Cooper, Donald B. 1987, “The New Black Death’: Cholera in Brazil, 1855–1856,” in Kenneth F. Kiple, ed., 1987, *The African Exchange: Toward a Biological History of Black People* (Durham: Duke University Press), pp. 235–256.
- Diário de Amazonas. 2020, “Amazonas tem áreas indígenas nos 62 municípios,” (<https://d24.am.com/amazonas/amazonas-tem-areas-indigenas-nos-62-municipios/>) (最終閲覧: 2021.12.10).
- Gibbon, Lardner. 1854, *Exploration of the Valley of the Amazon Made under Direction of the Navy Department, by WM. Lewin Herndon and Lardner Gibbon, Part II.* by Lt. Lardner Gibbon (U.S. Senate, 32d Congress, 2d Session, Executive No. 36), (Washington: A.O.P. Nicholson). (<https://archive.org/details/valleyamazon/page/n17/mode/2up>) (最終閲覧: 2021.9.7)
- Gonçalves, Eurípedes Antônio Funes Adelaide Gonçalves. 2012, “La creación de la Amazonía brasileña a través de los viajeros,” *Revista PASOS*. (<http://www.repositorio.ufc.br/handle/riufc/19167>) (最終閲覧: 2021.9.7).
- Herndon, Lewin. 1853, *Exploration of the Valley of the Amazon Made under Direction of the Navy Department, by WM. Lewin Herndon and Lardner Gibbon, Part I.* by Leut. Herndon (U.S. Senate, 32d Congress, 2d Session, Executive No. 36), Washington: Robert Armstrong. (https://archive.org/details/gri_000233125012650640/page/n7/mode/2up) (最終閲覧: 2021.9.7).
- Hill, Lawrence F. 1970 [1932], *Diplomatic Relations between the United States and Brazil* (Westport: Greenwood Press).
- IBGE (Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística). 2012, *Os indígenas no censo demográfico 2010: Primeiras considerações com base no quesito cor e raça* (Rio de Janeiro: IBGE). (https://www.ibge.gov.br/indigenas/indigena_censo2010.pdf) (最終閲覧: 2021.12.10)
- ISA (Instituto Socioambiental). 2021, “Localização e extensão das TIs,” (https://pib.socioambiental.org/pt/Localização_e_extensão_das_TIs) (最終閲覧: 2021.12.10).
- . 2022, “Plataforma de monitoramento da situação indígena na pandemia do novo coronavírus (Covid-19) no Brasil,” (<https://covid19.socioambiental.org>) (最終閲覧: 2021.12.10).

- 覧：2021.12.10).
- Keller, Franz. 1875, *The Amazon and Madeira Rivers: Sketches and Descriptions from the Note-book of an Explorer*, New Edition (Philadelphia: J.B. Lippincott and Co.) (<https://archive.org/details/amazonmadeirariv00kelluoft>) (最終閲覧：2021.9.7).
- Keller, José. and Keller, Francisco. 1869, “Exploração do rio Madeira,” Anexo X, in *Relatório apresentadp à Assemblêia Geral Legislativa na primeira sessão da décima quarta legislatura pelo Ministro e Secretário de Estado dos Negócios da Agricultura, Commercio e Obras Publicas, Joaquim Antônio Fernandes Leão* (Rio de Janeiro: Typographia do Diario do Rio de Janeiro) (<http://ddsnext.crl.edu/services/download/pdf/2061?from=000913&to=000974>) (最終閲覧：2021.12.28).
- La Condamine, Charles Marie de. 1745, *Relation abrégée d'un voyage fait dans l'intérieur de l'Amérique méridionale. Depuis la côte de la Mer du Sud, jusqu'aux côtes du Brésil & de la Guiane, en descendant la riviere des Amazones* (Paris: Veuve Pissot) (<https://archive.org/details/A297090>) (最終閲覧：2021.9.7).
- Machado, Maria Helena P.T. 2005, “Brasil a vapor: Raça, ciência e viagem no século XIX,” tese de livre-docência, Departamento de História, FFLCH-USP. (https://www.academia.edu/4029813/Maria_Helena_Perreira_Toledo_Machado_Brasil_a_Vapor_Raça_Ciência_e_Viagem_no_Século_XIX_Tese_de_Livre_Departamento_de_História_FFLCH_USP_2005) (最終閲覧：2021.8.1).
- Machado, Maria Helena P.T. ed. 2006, *Brazil through the Eyes of William James: Letters, Diaries, and Drawings, 1865–1866* (Cambridge: Harvard University Press).
- Marcy, Paul. 1875, *Travels in South America: From the Pacific Ocean to the Atlantic Ocean*, Vol. II (New York: Scribner, Armstrong, & Co.) (<https://archive.org/details/travelsinsoutham02marcuoft/page/n9/mode/2up>) (最終閲覧：2021.8.1).
- Meade, Teresa. 1986, “‘Civilizing Rio de Janeiro’: The Public Health Campaign and the Riot of 1904,” *Journal of Social History*, 20 (2), pp. 301–322.
- . 1989, “‘Living Worse and Costing More’: Resistance and Riot in Rio de Janeiro, 1890–1917,” *Journal of Latin American Studies*, 21 (2), pp. 241–266.
- . 1997, *“Civilizing” Rio: Reform and Resistance in a Brazilian City, 1889–1930* (University Park, PA: Penn State University Press).
- Needell, Jeffrey D. 1987, “The Revolta Contra Vacina of 1904: The Revolt against ‘Modernization’ in Belle-Époque Rio de Janeiro,” *Hispanic American Historical Review*, 67 (2), pp. 233–269.
- Rio de Janeiro. 2020, “Primeiro caso do coronavírus confirmado no Estado do Rio,” (<https://www.saude.rj.gov.br/noticias/2020/03/primeiro-caso-do-novo-coronavirus->

- e-confirmado-no-estado-do-rio) (最終閲覧: 2021.12.10).
- Schwarz, Lília M. e Starling, Heloísa M. 2020, *A bailarina da morte: A gripe espanhola no Brasil* (São Paulo: Companhia das Letras).
- Sevcenko, Nicolau. 2010, [1984], *A Revolta da Vacina* (São Paulo: Cosac Naify).
- Spix, Johann Baptist von. e Martius, Carl Friedrich Philipp von. 1981 [1831], *Viagem pelo Brasil, 1817–1820*, 3 (Belo Horizonte: Itatiaia, São Paulo: Edusp).
- Stepan, Nancy. 1981, *Beginnings of Brazilian Science* (New York: Science History Publications).

〈Summary〉

The Politics of Infectious Diseases —A Lesson from Brazil—

Shigeru SUZUKI

The COVID-19 pandemic has raised interest in the history of previous pandemics faced by mankind. Changes in political economy and society are generally caused by complex and multiple factors and are not so simple that an infection can be considered the principal one. But, pandemic is not an “inside story” of history. It sometimes makes various problems visible that have been invisible in society. And to ask what kind of political, economic, and social context in will an infection “be made an issue” will provide the clue to elucidate the meaning of the social change.

In this article, I think about the significance of the historical studies of pandemics, picking up mainly on smallpox and yellow fever outbreaks in Brazil from the 19th century through the beginning of the 20th century. It is well known that a foreign infection such as smallpox had a destructive influence on indigenous society in Mexico and Peru in the 16th century. Brazil was no exception. Jean de Lery, a French Calvinist who stayed in the fort on Guanabara Bay in the mid-16th century, referred to a certain “heavy fever” among the indigenous people. From the beginning of the 19th century, many scientific missions were sent to Brazil from Europe, and we can find various cases of pandemics in the travel books they published. Johann Baptist von

Spix and Carl Friedrich von Martius, German zoologist and botanists who collected specimens in the Amazon Valley, landed at Belém do Pará in the middle of the smallpox pandemic in 1819. Paul Marcoy, a French naturalist, who traveled to Belém from Peru along the Amazon River and its tributaries from 1846 to 1847, found many mission villages attacked by smallpox in the upper parts of the Amazon basin. Another naturalist in the same epoch, Henry Bates, who stayed in the Amazon Valley for eleven years from 1848, witnessed a yellow fever pandemic in Belém in 1850 besides smallpox. In fact, yellow fever entered Brazil in around 1849 for the first time through a slave ship from Western Africa and provoked a pandemic first in Bahia, spreading to the south and north, reaching Rio de Janeiro and Belém.

In the second half of the 19th century, as the abolition of slavery became imminent, Brazil tried to attract European immigrants not only as a workforce to substitute black slaves but also to “whiten” the nation by “purifying” the blood “polluted” by African descendants. But, the yellow fever was a serious obstacle to immigration because Europeans believed that Caucasians were more vulnerable to yellow fever than black people, and were fearfully afraid of it.

So, to promote European immigration, the Brazilian government took a racially biased hygienic policy emphasizing yellow fever more than other infectious diseases such as smallpox that was sacrificing black people more. The influence of pandemics on social change is not direct but is worth studying to let potential problems appear in Brazilian history.